

「文字の歌」としての「童謡」「表相」

山本大介

—『続日本紀』、『日本靈異記』を中心に—

一 はじめに

『日本靈異記』（以下『靈異記』）には、歌謡が十首存在する。そのうち上巻第二縁にみえる、狐の正体を顕したがために去る妻を恋う夫がうたった歌、上巻第四縁における聖徳太子に窮地を救われた「乞句」の歌、中巻第二縁における弟子信行の死を嘆く行基の歌の三首を除いた七首は、いずれも事件の発生を未然に予兆していたとされる「表相」の歌である。

- (a) 古比波未奈 和我字弊邇於知奴 多万可支流
波呂可邇美江天 伊爾師古由惠邇
和可於保支見乃 三奈和数良礼女
加良須止伊布 於保乎蘇止利能
止母爾止伊比天 佐岐陀智伊奴留
奈礼乎會與咩爾保師登多礼 阿牟知能古牟智能余呂
豆能古 南无々々邪 仙佐加文佐加母 持酒之利
法万宇師 夜万能知識 阿万志爾々々々々
- (b) 伊可流可乃 三乃乎可波乃 太江波己會
伊爾師古由惠邇 上巻第二縁
- (c) 和可於保支見乃 三奈和数良礼女
加良須止伊布 於保乎蘇止利能
止母爾止伊比天 佐岐陀智伊奴留
奈礼乎會與咩爾保師登多礼 阿牟知能古牟智能余呂
- (d) 豆能古 南无々々邪 仙佐加文佐加母 持酒之利
法万宇師 夜万能知識 阿万志爾々々々々

(中巻第三十三縁)

- (e) 年少失王 最失王也 破注 非綾止々呂支彼与 志我
幾何売命 衰也 觚鉏等波与 志我幾 売命

(下巻第三十八縁。以下同)

- (f) 法師等乎 裙着輕侮 會之中腰帶薦槌懸

- (g) 我之黒見會比 麻多尔宿給へ 人成マテ

- (h) 正相木本者 大徳食肥而立来也

- (i) 朝日刺 豊浦寺西有耶 押天耶 桜井尔 押天耶
押天耶 桜井尔 白玉磯著耶 吉玉磯著耶 押天耶
押天耶 然面者 國會榮 我家會榮耶 押天耶
大宮二 直向山部之坂 痛奈不踐會 土二ハ有止毛

- (j) は中巻第三十三縁にみえる大和国十市郡菴知村に住む

鏡作造の女子が、求婚された男と初夜を迎えた明朝、頭と指を
残して食い殺された事件を予兆していたという歌謡である。下
巻第三十八縁にみえる(e)(f)(g)(h)(i)(j)は、
道祖王ほか王たちの死や淳仁の退位と配流、道鏡の台頭、光仁
と桓武の即位といった聖武崩御より以降の「日本国」の政治の
動向に係わる事件を未然に予兆していたという歌謡である。と

りわけ下巻第三十八縁においては、以上の歌謡による「表相」とその後起こった事件にあたる「表答」との対応関係を並べて記す歴史叙述を構成している。

以上の『靈異記』に記載された歌謡十首の表記に着目すると、(a)(b)(c)については音仮名による一字一音の表記がなされている。対して、(d)(e)(f)(g)(h)(i)(j)の所謂「表相」と呼ばれている歌謡については、総じて音仮名による表記ではなく、訓字による表記、あるいは下巻第三十八縁においては助字が小字で記された宣命体に類する表記で叙述されている。(a)(b)(c)の叙情的な歌謡については音仮名による一字一音表記、予兆を意味する「表相」の歌謡については音仮名と訓字による表記で記すという、歌謡の表記方法において一定の書き分けがなされているかのようにみえる。

ところで、『靈異記』下巻第三十八縁に記された光仁帝の即位と桓武帝の即位の予兆とされる歌謡(i)(j)には、それぞれ史書と催馬楽に類歌が存在する。

(k) 葛城寺乃前在也。豊浦寺乃西在也。於志止度。刀志止度。

桜井尔。白壁之豆久也。好壁之豆久也。於志止度。刀志止度。

然為波。国曾昌由流也。吾家長曾昌由流也。於志止度。刀志止度。

止度

(l) 可川良支乃 天良乃末戸名留也 止与良乃天良乃 尔

之奈留也 江乃波為尔 之良太万之川久也 末之良太

末之川久也 於々之止々 於之止々 加之天波 久

尔曾左加江无也 和伊戸良曾 止美世无也 於々之

止々 止之屯止 於々之屯止 止之屯止

(m) 於保美野邇。多太仁武賀倍流。野倍能佐賀。伊太久那布美蘇。都知仁波阿利登毛。

(k) は『続日本紀』卷第三十一、光仁天皇即位前紀に記載された光仁登極の予兆とされる「童謡」(l) は催馬楽「葛城」(m) は『日本後紀』卷十三、大同元年四月七日条所載の桓武天皇薨伝のなかにみえる桓武登極の予兆を示す「童謡」である。歌謡の表記に着目すると、『続日本紀』の(k) は『靈異記』の(i)と同じく音仮名と訓字による宣命体に類する表記で記されている。一方、(l)(m)の歌謡については、音仮名による一字一音の表記である。このことは、これらの歌謡がうたわれた奈良末平安初期において、予兆歌謡は音仮名主体でも訓字主体でも記載することが可能であったことを意味する。であるならば、『靈異記』と『続日本紀』が一字一音でなく訓字で予兆歌謡を叙述したことが問題となる。

『続日本紀』所載の光仁登極の予兆歌謡(l)では、「識者」の解釈により、歌詞の「井」は井上内親王の名の意、「白壁」は光仁の諱の意であるとし、それらを根拠に「童謡」が光仁登極の予兆であるとす。とりわけ「白壁」の歌詞については、『靈異記』や催馬楽「葛城」の類歌に「白玉」とあることから、「白壁」か「白璧」かが問題となり、類歌と同じく「白壁」とする説、光仁の諱との符合を根拠に「白壁」とする説、「白璧」を「白壁」の付会とする説、「白壁」「白璧」いずれにも読める字で書かれたとする見解など、諸説議論がなされてきた。¹⁾ 沖森卓也氏は、『日本書紀』の「童謡」が万葉仮名による一字一音の表記であるのに対し、『続日本紀』所載の(l)が「宣命体で書かれて

いる」ことに着目し、『続日本紀』が宣命書きをするのは、『漢書』や『後漢書』の童謡の影響によるため、それゆえ表意識を主体にして漢文風に表記したものである」と、『続日本紀』の「童謡」の宣命書きに中国の史書五行志の「童謡」の影響を認めるに加え、宣命書きによる漢文風の表記は「表意識を主体」とした表記であるとする。また、末次智氏は、沖森氏の説を受けて、

ここで重要なのは、「白壁」と「白壁」の違いが、文字の相違になっていることである。つまり、「白壁」へ改変されたとすれば、文字を前提にしていることである。さらに、このうたは文字上の大きな特色がもう一つある。それは、『続日本紀』のうた（歌謡）七首のうち、これのみが宣命体で書かれていることである。（……）ここにも、文字への強いこだわりが見られる。つまり、ワザウタ記述の背後に隠れていた編者意識が強く反映されているのである。

と、(一)の「童謡」の表記に『続日本紀』編者の「文字への強いこだわり」を指摘する。両氏の見解は、(一)の「童謡」の叙述のありようから、「表意識」が「文字への強いこだわり」を指摘している点において共通している。このことから、(一)の「童謡」としてのありようは「童謡」の文字に内在された「表意識」が「文字への強いこだわり」によって支えられているといえよう。ならば、「童謡」の予兆歌謡としての神秘性を支える「文字へのこだわり」「表意識」と、「童謡」が一字一音でないかたちで叙述されることとはおそらく無関係ではない。さうらにえば、表意識を抱えた文字による文字列をもって「童謡」

を叙述すること、世間で流行した歌の声やことは奥深くに秘された事件の予兆としての意味を解読する知とは不可分の関係にあると考えられる。そして同様のことは、(一)の「童謡」と同じく訓字と音仮名とによって記された『靈異記』の予兆歌謡においてもいえるのではないだろうか。

一字一音でなく訓字と音仮名を通して記すという「表意識」を主体とした表記でもって予兆歌謡を記すことは、予兆歌謡のありよう―世間で流行した歌謡と歌謡を予兆として読み解く解釈の知との相関関係、事件を予兆する歌謡を通して構成される歴史叙述との関係―と如何に関わるのだろうか。

以上のような問題意識のもと、『続日本紀』所載の「童謡」と『靈異記』所載の「表相」歌謡について、歌謡の文字表記と解釈との関係を考察する。

二 「童謡」を記す文字列と予兆としての意味

——『日本書紀』の「童謡」と『続日本紀』の「童謡」——

「童謡」とは、とりわけ政治の中枢に関わる事件の動向について、事件の発生より以前に世間で流行していた歌謡によつてすでに予兆されていたと解される歌謡をいう。中国、朝鮮の史書にみえ、日本では『靈異記』以前には『日本書紀』のなかにみえる。とりわけ皇極紀以降の予兆歌謡については、「童謡」と記され、『漢書』『後漢書』『晋書』など中国史書五行志にみえる「詩妖」「謡」「童謡」の影響が指摘されている。そして、「童謡」は事件と対応するかたちで史書に組み込まれることで歴史叙述を構成する。世間に流行した歌の声を、時の政治動向と密

接な事件の発生と関連させた歌の解釈とともに史書のなかに編成させた歴史叙述は、編纂者や叙述者の歴史観や自土意識をテキストに内包させる。いわば、事件の予兆としての歌謡と事件の発生との関連性を通して歴史観や地域性を構築する実践や知のありようとして「童謡」を捉えることができよう。

以下、「日本書紀」と「続日本紀」の「童謡」を比較しながら、歌謡の文字表記と歌謡を事件の予兆であるとする解釈との関係について考察する。

まずは『日本書紀』の「童謡」について例をあげて考察する。

戊午、蘇我入鹿独謀、将廢上宮王等、而立古人大兄為天

皇。于時、有童謡曰、

伊波能杯爾いはのへに 古佐屢渠梅野俱こさるこめやく 渠梅多爾母こめだにも
 多礙底騰哀囉栖たげてとはあせ、歌麻之之能烏賦かまのののえうふ。

〔『日本書紀』皇極二年十月条〕

蘇我入鹿が聖徳太子の御子たちを廢し、古人大兄を立てて天皇にしようとしたときにうたわれたのが右の「童謡」である。岩の上の猿が米を焼いて山羊に供えて食べるようお願いするという歌の内容は、『日本書紀』新全集本頭注によると「春の初めの豊穰を祈る予祝歌」とある。しかし「童謡」に続く割注に「蘇我臣入鹿、深忌上宮王等威名、振於天下、独謨儻立」と記され、さらに翌月十一月条においては、歌の表層の歌詞から窺われる予祝歌としての意味とは異なる歌意が明らかになる。

時人、説前謠之応曰、以伊波能杯爾、而諭上宮。以古佐屢、而諭林臣。人林也。以渠梅野俱、而諭燒上宮。以渠梅托爾母、

陀礙底騰哀囉栖、柯麻之々能鳴賦、而諭山背王之頭髮斑雜毛似山羊。又棄捨其宮匿深山相也。

〔『日本書紀』皇極二年十一月条〕

「時人」の解釈によると、「岩の上に」とは「上宮」の諭、「小猿」とは林臣（蘇我入鹿）の諭、「米焼く」とは「上宮を焼く」ことの諭、「米だにも」以下は「山背王の頭髮が山羊に似ていること」の諭であるとし、「山背大兄が宮を捨てて深山に隠れたこと」の予兆であるという。「童謡」の歌詞の言葉の奥に秘められた意味が、「諭」「相」というかたちで解読される。

このような「童謡」と歌謡の言葉から解読される意味との関係性について、吉田修作氏の見解が注目される。吉田氏は、古代における「言霊」について論じるなかで、民間の歌のなかにおける「言霊」とは「さきはひ」と「わざわひ」のいずれかをもたらずか不明な、「多義的な混沌性を抱え込んだ言語観念、言語信仰」であると捉え、その具体的なありようが「童謡」に端的にあらわれていると指摘する。そして歌の意味が解釈される以前の「童謡」は、「さきはひ」「わざわひ」いずれにもなりえる多義的な混沌性に支えられており、「時人」らによって「童謡」が内包する「諭」が解き明かされることによって、「言霊」のさきはひ「言霊のわざわひ」が招来されると解く。

先の「童謡」でいうならば、小猿が焼米を山羊に供えるという歌謡の歌ことばの表層からうかがえる様相は「混沌性」を抱えたありようとしてあり、「時人」による解読を通して歌謡が内包する「混沌」のなから予兆としての意味が「諭」「相」として見出される。そして、歌謡に予兆としての意味が新たに

付与されることによつて、歌謡は「童謡」になると捉えることができる。

「童謡」の表記に注目すると、『日本書紀』の「童謡」は前掲の用例に限らず総じて一字一音で表記されている。一字一音の音仮名による「童謡」の表記と時人による歌の解釈とは、一見相関関係がうかがわれないうちにみえる。

しかし、このような『日本書紀』の「童謡」にみえる「童謡」を叙述する表記と「童謡」の解釈との関係性は、『続日本紀』の「童謡」においては様相が異なる。改めて『続日本紀』に記載された光仁登極の童謡（一）を、歌の解釈と関わる前後の文章と併せて引用する。

菅龍潜之時。童謡曰。

葛城寺乃前在也。豊浦寺乃西在也。於志止度。刀志止度。

桜井尔。白壁之豆久也。好壁之豆久也。於志止度。刀志止度。

然為波。国曾昌由流也。吾家良曾昌由流也。於志止度。刀志止度。

于時井上内親王為妃。識者以為。井則内親王之名。白壁為天皇之諱。蓋天皇登極之徵也。

まず、『日本書紀』の「童謡」が一字一音表記であるのに対し、『続日本紀』の「童謡」は訓字と音仮名による宣命書きによつて叙述される。

さらに、『続日本紀』の童謡では、訓字で書かれた歌の文字が、歌の解釈と不可分の関係にある。「童謡」を解釈した「識者」は、「童謡」の歌詞「桜井」の「井」に妃となつた井上内親王を、「白壁」に光仁の諱である「白壁」との符合を見出し、これらを根拠に「天

皇登極の徴」との見解を下す。先の章でも触れたように、この「童謡」において光仁登極の根拠となる「白壁」の歌詞について、「白壁」か「白壁」か、あるいは両方ともとれる多層性を抱えた表記なのか、諸説議論がなされてきた。「識者」の解説に天皇の諱とあることとの関係を考慮するならば、「童謡」の歌詞は「白壁」とするのが整合性がある。しかし「白壁」にしろ「白壁」にしろ、光仁の諱である「白壁」を想起させる文字である「壁」「壁」であることに、この「童謡」の予兆歌謡としての意味がある。井上内親王の「井」、そして光仁の諱「白壁」、歌謡の解釈と歌の表記とが符合することこそが、この歌謡を「童謡」とらしめているのである。このような「童謡」の歌詞の文字と「童謡」の解釈との相関関係は、『日本書紀』の「童謡」のように一字一音によつて叙述する方法では成立し得ない。光仁の諱である「しらかべ」を一字一音でなく「白壁」、あるいは「白壁」を想起させる「白壁」の文字で記すからこそ為し得るのである。

世間で流行した歌謡が、事件の予兆を意味する「童謡」であると認定されるのは、事件の発生の際、「識者」の知を通じて事件の発生と歌謡との相関関係が見出されて以後である。「識者」の解説以前に、(一)の歌謡が『続日本紀』にみえる表記で記されていたとはかぎらない。

そのように考えるならば、(一)の「童謡」にみえる「白壁」の表記には、歌謡が抱える混沌の奥にある予兆の意を見出す「識者」による解説の関与が推察される。そして、そのような「識者」による歌謡の解釈と「童謡」とを、「童謡」の叙述のなかにおいて関連づけているのが、訓字表記による「白壁」あるい

は「白壁」の文字であると考えられる。

訓字表記によって「白壁」と記すことは、単に世間で歌われていた歌の声や言葉の痕跡を文字として記すという意味にとどまらない。歌謡が抱え込む混沌の深奥にあつて「識者」の知によつてでしか知りえない歌謡の意が、歌謡を「童謡」として叙述する文字列の中に立ち現れているということの意味している。事件を予兆の意味が見出された歌謡を、訓字と音仮名による文字列を通して「童謡」として叙述することそのものが、歌謡の奥に潜む意味の解釈と歌謡とを結びつける実践であるといえる。いわば「童謡」を叙述する文字もまた、「識者」が「童謡」が抱え込む混沌より見出した解釈の一端を担っているのではないか。

「童謡」が抱える混沌の奥に潜む意味が文字として現前しているということにおいて、訓字表記の「童謡」とは「文字の歌」であるということができよう。

三 「文字の歌」としての「表相」(一)

——「靈異記」中巻第三十三縁——

『日本書紀』所載の「童謡」と『続日本紀』所載の童謡との比較を通して、後者の「童謡」の訓字表記と、歌謡を事件の予兆として認定する解釈との関係について考察した。『続日本紀』と同様に一字一音の表記ではなく訓字でもつて「表相」の歌謡の記す「靈異記」の予兆歌謡においても、歌謡の文字と歌の解釈との相関関係が推察される。以下、中巻第三十三縁と下巻第三十八縁にみえる「表相」の歌謡について検証する。

『靈異記』において最初に「表相」の予兆歌謡がみえるのは中巻第三十三縁である。聖武天皇の時代、大和国十市郡菴知村の東に住む鏡作造の万の子という名の女子は、「彩の帛三つの車」の品々を送つて求婚してきた男と「闇の裏に交通く」。しかし、明朝に女子の両親が様子を見に行くと、女子は頭と指一本を残すのみであつたという怪異譚である。以下、この怪異を予兆していたとされる歌謡(d)を、歌謡の解釈についての叙述と併せて改めて引用する。

聖武天皇世、挙国歌詠之謂

奈礼乎會與咩爾保師登多礼 阿牟能古牟余智能余呂豆

能古 南无々々邪 仙佐加文佐加母持酒之利 法万宇

師夜万能知識阿万志爾々々々々

(……) 乃疑、災表先現。彼歌是表也。或言神怪、或

言鬼啖。覆思之、猶是過去怨。斯亦奇異事。

「表相」の歌謡の第一句は「汝をぞ嫁に欲しと誰」と求婚を想起させる歌詞からはじまり、第二句の「阿牟能古」アムノコ「余呂豆能古」は、頭と指を残して喰われた女子の名や住む土地を連想させる。これら歌の前半部は一字一音で表記される。しかし以降は音仮名による表記を基調としながらも、訓字による叙述がなされている。

「童謡」の文字表記という観点から注目すべきは、「南无」「仙」「法」「知識」といった語である。中田祝夫氏は、本説話の内容に仏教色はみられないとしながらも、「ただし、歌謡の中には、破戒の私度僧を非難した内容があるようにもみえる」と指摘する。中田氏の見解の根拠には、歌謡のなかに仏教語がみえるこ

とが関係していると推察される。また、出雲路修氏は、この歌謡を「仏教語を多用しての戯笑歌」と捉え、「歌の歌詞それ自体には奇怪なものが含まれているわけではない。仏教というきらびやかなイメージを織りこんで、男たちが、「おれたちみんな、おまえが好きなんだぞ」と、女にからかい半分で歌いかけたものの。語音の連想から連想へと展開する歌」との見解を述べている。「表相」の歌謡における仏教語の多用が、この歌の様相を規定しているという点において、両者の見解は一致している。

では、先の章で検討したように、訓字による予兆歌謡の表記が、歌謡を予兆の意と認定する解釈と不可分であるならば、この「表相」の歌謡についてはどうだろうか。

鏡作造の女子である万の子を襲った怪異の解釈に注目する。

景戒は、この怪異について「神怪」「鬼啖」と複数の説に触れたうえで、「覆す思ふに、猶し是れ過去の怨なり」と結論づける。この女人の死の事件からは、一見仏教の要素の介在は見受けられない。ゆえに「神怪」や「鬼啖」といった仏教の見知とは異なる事件の解釈が存在したとみられる。しかしながら、景戒は、この事件を「過去の怨」つまり、悪因悪報の因果応報の論理を通して理解している。景戒がこの事件を「覆す思ふ」内実の詳細は本縁では一切語られておらず、景戒がこの事件に仏法の論理を見出す具体的な根拠は明らかにされない。しかし、少なくとも景戒は女人の無残な死が、女人の過去生に起因しているという見解を示している。事件の表層からは窺い知れない女人の死の向こう側に、仏法の因果の存在を認めているのである。

このような一見非仏教的にみえる事件のなかに仏教の要素を

見出す景戒の認識の根拠はどこにあるのか。女人の死を未然に予兆していた「表相」歌謡の表記と関係してはいないだろうか。つまり、歌謡の歌詞のなかにみえる「南无」「仙」「法」「知識」といった語は、歌謡を事件の予兆であるとする解釈を通して見出された痕跡ではないだろうか。いわば歌謡の叙述のなかに一字一音ではなく「南无」「仙」「法」「知識」というかたちで記された文字を通して、歌謡のなかに内在されていた事件の予兆を示す力や事件の因果関係に仏法の論理が介在していることを、歌の表記そのものが明示しているのではないだろうか。

四 「文字の歌」としての「表相」(二)

——「靈異記」下巻第三十八縁——

では、聖武崩御から桓武即位に至る歴史叙述の一端を為している下巻第三十八縁の歌謡についてはどうか。以下、下巻第三十八縁にみえる歌謡のうち、道祖王はじめ王たちの獄死と淳仁天皇の廃位の予兆とされる歌謡(e)を取りあげて、歌謡の文字と予兆の解釈との関係を考察する。

下巻第三十八縁は、聖武が命終におよんで、孝謙と道祖王とによる共同統治を遺詔し、藤原仲麿に遺詔の遵守を「禱」させる。聖武崩御後、遺詔に基づき孝謙と道祖王との共同統治が敷かれるものの、道祖王ほか王たちは殺され、淳仁もまた廃位し、代わって病の治癒を契機に称徳と同衾した道鏡の台頭、光仁即位、桓武即位へと至る。このような聖武崩御以降の政治の動向の変遷が、事件と事件を未然に予兆した「表相」との関係を通して語られる。

こうした下巻第三十八縁の歴史叙述が、聖武の遺詔の「禱」の話より語り始められている点が注意される。「禱」の内容を考慮しながら聖武崩御後の歴史叙述をみていくと、道祖王ら私たちの失脚と廢太子は、聖武の遺詔の「禱」の破棄を意味し、称徳と道鏡による共同統治は聖武の意向と反する共同統治の実現を意味する。いわば、下巻第三十八縁の展開は、聖武の「禱」を起因とする歴史叙述を構成しているのである。

そして、聖武の遺詔の「禱」の破棄を意味する道祖王の獄死および王らの廢太子や淳仁の配流を未然に予兆していたという「表相」の歌謡が（e）である。

（e） 年少失王 最失王也 破注 非綾止々呂彼与 志我幾
何売命 衰也 魼鮒等波与 志我幾 売命

冒頭の詩句「年少失王、最失王也」は王たちの失脚を指しているという見解で諸説一致している。その一方、以降の句の解釈については未だ定説をみない。なかでも注目したいのは「魼鮒」である。諸注においては「魼鮒かれい」「ヒラメ科の海魚」のことをさし、黄文王たちや藤原仲麿の失脚を指すという見解で概ね一致している。そのなかで、出雲路修氏は「比目魚」のことであろうとし、「比目魚」が『芸文類聚』に祥瑞としてあることを根拠に、「祥瑞であるはずの比目魚の衰弱をなげく。天皇の衰微を危惧する」との見解を示している。「魼鮒」が「比目魚」であるならば、この「比目魚」はいかなる点において事件の予兆の意と関わるのか。

改めて出雲路氏の指摘する「芸文類聚」の記述を中心に、「比目魚」について確認する。「比目魚」は『芸文類聚』第九十九卷、

祥瑞部下に「爾雅曰、東方有比目魚。不比不行。其名曰鰈」とあり、また「瑞応凶曰、比目魚者、王者明德則見」、「晋郭璞比目魚賛曰。比目之鱗。別号王余。雖有二片。其実一魚。協不能密。離不為疏」と、「瑞応凶」や郭璞の賛を引いた記事がみえる。また、『一切経音義』の「東鰈」の注として「貪盍反。比目魚也。状如牛脾。細鱗黑色爾。半魚各有一目相合乃行。江東水中有此魚也。俗呼王余。説文魚也」とみえる。「比目魚」とは、東方の辺境に住む一つ目の魚で、二匹が並び身体を合わせて一魚となつてはじめて泳ぐことができる生態の魚であり、「王者明德則見」を現す祥瑞であるという。時代は下るが、『延喜式』巻第二十一、治部省・祥瑞の条に「大瑞」の一つとして「比目魚」の名がみえる。

また、『戦国策』燕巻第九には、燕王に献上された書簡の一節に

比目之魚、不相得即不能行。故古之人称之。以其合而如一也。今山東合弱而不能如一。是山東之知不如魚也。（中略）
今山東三国弱、而不能敵秦、索二国、因能勝秦矣。
とみえる。「比目之魚」が二匹で一体となつて泳ぐ様子を称えた「古人」の言葉をあげ、秦国と対峙するためには、山東の諸国が連合し一体とならねばならないと進言する内容で、「比目之魚」が異なる国同士がともに一体となつて政を行うことを尊ぶ喩として用いられている。

なかでも二匹で一魚であるという比目魚の生態は、聖武の遺詔に基づいておこなわれた孝謙と道祖王による共同統治を想起させる。加えて「比目魚」の「王者明德則見」の祥瑞として

の意や、『戦国策』にみえる諸国一体となって政を行うことの喩としての意を考慮するならば、『靈異記』の歌謡（e）における「比目魚」を意味する「魺鮠」とは、聖武の遺詔に基づく孝謙と道祖王とが一体となっておこなわれる共同統治をさし、王の徳を現す祥瑞を意味する魚と重なる統治であることを示す喩なのではないか。そして歌謡の「衰也 魺鮠等波与」とは、祥瑞に象徴されるような共同統治の衰退を意味しているのではないか。つまり「魺鮠」の二字を含む歌の文字列は、聖武の遺詔に基づいて取りおこなわれた孝謙と道祖王との共同統治が親皇の滅亡にともない破棄されるという予兆の意味を、歌謡の歌詞の文字列の上に現出させる叙述と考えることができるのではないか。

先に述べたように、『靈異記』下巻第三十八縁の歴史叙述の文脈においては、道祖王の獄死による廃太子は、「禱」によって誓約された聖武の遺詔の破棄を意味する。このことは、中巻序において「聖皇」として称賛される聖武の御世の終焉であるとともに、遺詔を藤原仲麿に誓約させる言葉「若朕遠勅失之者、天地相憊、被大厲」にみえる遺詔の「禱」の破棄に伴う「大厲」の発動を意味する。道祖王らの廃太子による共同統治の終焉を「魺鮠」の衰退を通して示す「表相」の歌謡は、『靈異記』が語る「聖皇」聖武を中心とした「日本国」の歴史の転換を語る歴史叙述の一端を担っているといえよう。

五 まとめ

以上、『日本書紀』の「童謡」にみえる一字一音表記ではな

く、訓字でもって予兆の歌謡を叙述する『続日本紀』の「童謡」、『日本靈異記』の「表相」の歌謡について、歌謡の訓字表記と予兆としての解釈との関係に注目しながら考察してきた。世間で流行した歌謡のなかに潜む予兆の意が解読されたとき、解読された予兆の意を想起させる文字が、訓字による歌謡の叙述を通して、歌われていた歌謡の歌詞を記す文字列のなかに組み込まれていく。そのことにより、訓字で表記された予兆歌謡は、歌謡が抱え込む混沌性に潜む意味を、文字列の上に現出させることになる。そして事件の予兆の意味を抱えた「文字の歌」と事件の発生との関係を通して、『続日本紀』では新たな皇統の天皇の誕生が叙述され、『靈異記』中巻第三十三縁では一見仏教とは無縁な事件の背後に仏法の理法が存在が示され、下巻第三十八縁では「日本国」の「聖皇」聖武の時代の終焉が語られる。誰ともしれず人々の声を通して流行した歌謡が、事件の予兆としての意味を抱えた文字とともに「表相」「童謡」として叙述される様相および歴史叙述との関係を見て取ることができたとと思われる。

本稿では触れられなかった『靈異記』下巻第三十八縁の「表相」の歌謡についても、予兆の解釈と歌謡との文字との関係に着目しながらの検討が可能かと思われる。それらについては別稿を期したい。

※本文の引用について、『日本靈異記』は、新編日本古典文学全集『日本靈異記』（中田祝夫校注、小学館、一九九五年九月）により、原文は適宜修正した。『日本書紀』は新編日本古典文学全

集『日本書紀』三（小島憲之ほか校注、小学館、一九九八年二月）、『続日本紀』は新日本古典文学大系『続日本紀』四（青木和夫ほか校注、岩波書店、一九九五年六月）、催馬楽は日本古典文学大系『古代歌謡集』（土橋寛ほか校注、岩波書店、一九五七年七月）、『日本後紀』は国史大系本（黒板勝美編、吉川弘文館、一九三四年）による。『芸文類聚』は汪紹楹校『芸文類聚』（中華書局、一九六五年）、『戦国策』は何建章注『戦国策注釈』（中華書局、一九九〇年）、『一切経音義』は大正新修大藏経による。なお、漢字の表記は常用・新字体に改めたものがある。

注(1) 『続日本紀』光仁登極の「童謡」については、宮岡薫氏に一連の研究がある（「白壁王の即位と童謡の表現」（『国語と国文学』第七五巻第五号、一九九八年五月）、「光仁即位前紀」の構成と童謡（真鍋昌弘編『歌謡 雅と俗の世界』和泉書院、一九九八年九月）、『続日本紀』の童謡の表現―「白壁・好壁」と「白壁・好壁」説の展開―（『甲南大学紀要』文学篇二二八号、二〇〇三年三月）など。「白壁」「白壁」の古写本の表記の検討と「白壁」の中国史書の讖緯説との関係について考察した論に佐々木聖佳「井の中の白玉考―『続日本紀』童謡と讖緯説―」、「白壁沈く／白壁沈く」の歌詞が有する意味の多層化に着目し、「童謡」の中国の知に加えてウガヤフキアエズの神話との関係を追究した論に稲生知子「光仁登極の（神話）―『続日本紀』にとつての童謡―」（『古代文学』第四十八号、二〇〇九年二月）がある。

(2) 沖森卓也「続日本紀の述作と表記」（『新日本古典文学大

系『続日本紀』四、岩波書店、一九九五年六月）。
 (3) 末次智「自覚するメディア―古代ワザウタの変遷―」（『想像する平安文学』3 言説の制度）勉誠出版、二〇一一年五月）。

(4) 『靈異記』における「表相」の歌謡について、先学では、記・紀に記される「童謡」ははじめ予兆を意味する歌謡との関係、政変が頻発する動向に伴う社会不安と「表相」との関係、景戒の歴史意識や中国史書の五行志に書かれた「童謡」との関係を通して景戒の思想に迫る研究がなされてきた。しかし、「表相」の歌謡を記す文字表記や叙述の思考については、未だ考察の余地があると思われる。

中村生雄「景戒の回心と『日本靈異記』」（『文学』第四十八号、一九八〇年三月）、近藤信義「靈異記の歌謡―下巻第三十八縁を中心として―」（『古代文学』第十九号、一九八〇年三月）、宮岡薫「日本靈異記」歌謡の表現―「朝日さす」を中心として―（『日本靈異記研究会編』『日本靈異記の世界』三弥井書店、一九八二年六月）、原田行造「『日本靈異記』における表相信仰の世界―因果応報思想との接点を求めて―」（『日本靈異記の新研究』桜楓社、一九八四年六月）、多田一臣「わざうた―呪歌―」（『古代国家の文学―日本靈異記とその周辺』三弥井書店、一九八八年）、近藤信義「白珠は―天平僧の嘆き―」（『万葉集』と仏教 覚書―）（今成元昭編『仏教文学の構想』新典社、一九九六年七月）、寺川真知夫「景戒と表相」（『日本国現報善悪靈異記の研究』和泉書院、一九九六年三月）、武田比呂男「景戒の夢解き―実践者のテキストとしての『日本靈異記』」（『古代文学会編』『祭儀と言説―生成の現場へ―』

- 森話社、一九九九年二月）、河野貴美子「『日本霊異記』の子兆歌謡をめぐって―史書五行志・『搜神記』・『法苑珠林』との関係―」（『説話文学研究』第三十七号、二〇〇二年六月）、永藤靖「景戒の歴史意識と御霊の発生―『日本霊異記』下巻・第三八縁を読む―」（『古代仏教説話の方法―『霊異記』から「験記」へ―（三弥井書店、二〇〇三年三月）など。
- (5) 益田勝実「詩妖の方法―ワザウタ語源考―」（『日本文学誌要』第二十三号、一九八〇年二月）、津田博幸「歴史叙述とシャーマニズム―『日本書紀』を中心に―」（『生成する古代文学』森話社、二〇一四年三月）、同「和歌とシャーマニズム―『日本書紀』を中心に―」（『生成する古代文学』森話社、二〇一四年三月）、増尾伸一郎「讖緯・童謡・焚惑―古代東アジアの予言的歌謡とその思惟―（小峯和明編『アジア遊学』一五九〈予言文学〉の世界―過去と未来を繋ぐ言説』勉誠出版、二〇一二年十二月）などを参照。
- (6) 吉田修作「『記紀にみる言霊』（『悠久』第一四〇号、二〇一五年四月）。
- (7) 新全集本頭注。
- (8) 山本大介「読む 聖武の遺詔とウケヒ―『日本霊異記』下巻三十八縁」（『日本文学』第五十九卷十二号、二〇一〇年十二月）。
- (9) 多田一臣氏は、「魺目」に同じ。蝶のこと。とし、「黄文王、塩焼王以下、また藤原仲麻呂らを寓しているのだから」とする（多田一臣校注『日本霊異記』下、ちくま学芸文庫、一九九八年一月）。また中田祝夫氏は、ヒラメとは別種の「硬骨魚綱ヒラメ科の海魚」であるととし、「かれひが捕らわれて籠の中にある姿は、偏平で他の魚類よりもよけいに元氣なく無残に見える。それが王子の逃れようのない哀れな運命を思わせたのである」とする（小学館新日本古典文学全集『日本霊異記』頭注）。
- (10) 山本前掲論文注（8）。また、このような聖武崩御後の歴史認識およびその叙述は、景戒が自らが生きる「日本国」の「今」を「末法」と捉える認識とも不可分の関係にある。山本大介「『人家々』と『聖君』―『日本霊異記』下巻第三十九縁の転生譚を中心に―」（『日本文学』第六一卷第九号、二〇一二年九月）、同「末法の経典と説話―『日本霊異記』下巻第三十三縁の引用経典と三階教―」（『古代学研究所紀要』第二〇号、二〇一四年三月）。